「平谷美樹の世界　―100冊目を刊行して、そしてこれから―」企画展

平谷美樹さん×及川図書館長 特別対談

1．記念碑的第100作目「天酒頂戴」を刊行して、今の気持ちは？

100冊目――。実際のところ、実感はないのです。今日が昨日の連続であるのと同じで、日々原稿を書き、本が出るということの繰り返しで、いつのまにか100冊になったというところでしょうか。

25年前、小松左京賞の授賞式の時に先輩作家に、「君は新人賞を受賞して、ゴールにたどり着いたと思っているかもしれないが、実は、これから死ぬまで続くトライアスロンのスタートに立っているんだよ」と、言われました。目から鱗の言葉で、以来、その言葉を常に肝に銘じています。

だから、100冊目の本も、死ぬまで続くトライアスロンの途上。寿命は誰にも分かりませんから、トライアスロンはあとどれだけ続くか分かりません。だから、次の作品、その次の作品と、構想を練っています。

2．作家生活25周年を振り返り、一番心に残っていることは？

25年を振り返ってですか――。色々ありますけれど、やはり小松左京賞の授賞式でしょうか。

あの時、すでにデビューして、本を1冊出していましたが、本格的な作家活動はあの日から始まりましたから。

3．作品のテーマはどうやって考えるのか？

作品のテーマは書いているうちに固まります。

時代小説、歴史小説、SF、ホラーを書くとき、わたしはまず「面白そうな話」を考えます。歴史的な事実・事件とか、面白そうな展開とか、そういうものをどういう物語にすれば面白くなるかを考え、次に、その物語の中で活躍する登場人物たちを考えます。物語の構成を組み立てて書き始め、書いているうちに、その物語が指し示す方向、テーマが見えてきます。その段階で、前に戻り、テーマに合うような場面を書き加えることもあります。テーマは物語と登場人物たちの心情、動きが作り出していくものだと思いますから、テーマを決めてから書き出すということは滅多にありません。

平谷さん刊行100冊目となる「天酒頂戴」

4．スランプに陥ることはありますか？克服方法は何ですか？

スランプに陥ることはほとんどありませんね。小説を書くときにはすでに頭の中に完成形がありますから、それに沿って書き進めます。もちろん、もっといい展開を思いつくこともありますので、その時にはそちらに路線変更をします。

若い頃は1時間に原稿用紙10枚書いていましたが、病気をしたり歳を取ったりして、集中力が続かなくなっています。ですから、疲れたり、文章がスラスラ出てこなくなったりすることはあります。そんな時には、別の仕事をしたり、フライフィッシングの毛鉤を巻いたり、コンピュータ相手にゲームをしたりして気分転換をします。

ともかく、焦らないことです。考えが行き詰まったりするのは誰にでもあることですが、たいてい遠からず何かの拍子に解決策が見つかるもの。苛々せずに気持ちを落ち着けた方が、解決策を見付ける早道です。

5．平谷さんの今後の展望、野望は何でしょうか？

今後の展望、野望ですか――。

作家業は死ぬまで続くトライアスロンですから、これからも粛々と執筆をし続けるのみですね。大きなヒット作はありませんが、まだ本を出してくれる出版社がありますので、面白い小説を書き続けます。

野望は特にないですけれど、書く小説に全部重版がかかるようになればいいなとは常々思っています（笑）

平谷美樹さん出版作品貸出ベスト5

同率
1位　貸し物屋お庸　江戸娘、店主になる

同率
1位　採薬使佐平次

2位　草紙屋薬楽堂ふしぎ始末

3位　採薬使佐平次　吉祥の誘惑

4位　でんでら国

5位　約束の地

平谷　美樹さん

作家。1960年岩手県生まれ。金ケ崎町在住。大阪芸術大学卒業。2000年6月『エンデュミオンエンデュミオン』でデビュー。

同年、長編SF『エリ・エリ』で第1回小松左京賞を受賞。源義経の影武者を描いた大作『義経になった男(1)～(4)』で注目を浴びる。

渤海を舞台にした壮大なスケールの『風の大国』シリーズ（全10巻）は「この時代小説がすごい！2014年版」で3位に選ばれ、歴史時代作家クラブ賞のシリーズ賞も受賞した。

著書は他に『でんでら国』（小学館）、『貸し物屋お庸謎解き帖』（大和書房）、『大一揆』（KADOKAWA）、宮古市民劇の原作にもなった『鍬ヶ崎心中』（小学館）、盛岡文士劇の原作にもなった幕末盛岡藩の家老楢山佐渡の生涯を描いた『柳は萌ゆる』（実業之日本社）がある。近著は『虎と十字架南部藩虎騒動』『賢治と妖精琥珀』『天酒頂戴』など。『天酒頂戴』で100冊刊行となり作家生活25周年を迎える。